OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
1995・9・30
12

もくじ

◇三代続いた海水茶屋 2
◇大磯の戦禍 4
◇トピックス 6
◇秋季特別展 7
◇行事案内／資料受入 8

今年の夏は記録的な猛暑が続き、各地の海水浴場は連日賑わいをみせたようです。大磯海水浴場は、明治18年の開設以来、長い歴史を培ってきましたが、時代とともにその様相も変わってきました。資料館では、大磯海水浴場にかかわる資料の収集や、古老からの聞き取りにも力を入れていますが、今回は大磯海水浴場で、かつて海水茶屋を営んでいた方の思い出を掲載させていただくことにしました。ここにご紹介するお二方は、草創期の大磯海水浴場の雰囲気を知る方として貴重な存在でしたが、残念ながらお二方とも昨年にご逝去されてしまいました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。なお、聞き取り調査は昭和62年2月18日、大磯町役場においておこないましたが、本稿は同年11月に神奈川県立婦人総合センターから刊行された『夜明けの航跡ーかながわ近代の女たちー』に掲載する目的で執筆されたものです。このたび、ご遺族および同センターのご理解をいただき、未掲載部分を含めて掲載させていただくことになりました。

三代続いた海水茶屋

真間千代子　橋本ソメ子

今でいふ海の家、大磯海水茶屋が始まったのは、私共の祖父真間長五郎の代からでした。当時の軍医総監だった松本順先生が大磯の海辺を最適な海水浴場として折紙をつけて紹介してくださった明治18年頃からでした。日本で一番最初に開かれた海水浴場だったと聞かされております。

当時の大磯には、伊藤博文公の別荘を中心にして、明治の政財界のお歴々が競って集まり、寒村の漁師町が活気に溢れておりました。大磯駅上の山手に明治の終り頃まで松招閣といふ大きな品格ある旅館がございまして、大磯の地に土地や家を求める有名人がこの宿に集まったようでございます。祖父長五郎は、この宿の主人に可愛がられて周旋の役を仰せつかってあちこちとお出入りして重宝がられ、まじめにお役に立ったようです。祖父は手足を縛ったまま亀のように泳ぎましたので、当時のおなじみ客、歌舞伎の五代目菊五郎から“亀長”と海水茶屋名をつけられましたが、何時の間にか真間長と呼ばれるようになりました。その祖父も“きのじより八十八へと橋をかけくもなく二つ三つ四つ”と歌を残して大正14年1月に七十七才で亡くなる前には、病床に岩崎家から鶏のスープが届けられましたし、帝大病院にも入れていただきました。

茶屋の始りは“いづ竹”“白長”“亀長”の三軒でしたが二代目長五郎を継いだ父昨次郎の代には八軒になっておりました。茶屋は7月の初めから9月の十日頃まででました。八軒の茶屋は各自に海のぢいや男衆を五、六人と女中を二、三人雇ってゐました。夕方には赤い毛氈から茶道具の一切を引上げて小屋を空にしました。早朝目ざめ次第に、ぢいやと女中たちは荷物の一切と井戸水を天秤棒でかついで茶屋まで運びました。その往復の幾回かは砂地に足がめりこんで相当な重労働でした。荷運びがすみますと、ぢいや達は砂地を熊手で掃き清めて天幕張りです。茶屋名とお客様持主の名入れの天幕です。竹竿で四方を張った地厚い白い天幕が殆んどでしたが、その間に點々と色とりどりのビーチパラソルがまじって早朝の夏の大海原をバックにそれはすがすがしく美しい光景でございました。

ぢいやたちは黒く陽焼けした体に白い六尺姿もありましたが、各自茶屋の印しの入った手拭いを頬かむりか鉢巻きにして海水パンツで、白くペンキ塗りした上に茶屋名が大きく印されたキルク木製の大きな浮輪を肩にかけてそれぞれごひいきの御得意様のあとに従って海辺に向って行く後姿が目に浮かびます。大きな浮輪を中にして、二、三組のお客様をまもって泳ぎの面倒をみてゐました。ですから、お茶屋にかかっていたら、子供さん達だけよこしても安心してまかされるとして茶屋と海のぢいや達に絶対の信頼感をもってゐました。たまに遭難があっても、茶屋全体のぢいや達が総出で救助にあたりましたので、人身事故の被害は殆んどありませんでした。茶屋の女中はたすきがけ、お太鼓に浴衣姿で一と夏働きました。

早朝の荷運びがすむと、三つの縁台に赤い毛氈を敷いて、麦茶をわかす炭火の火おこしから始りました。お得意様がいつ見えてもすぐ出せるようにあづかってゐる水着やタオルを名入りの竹ごりに揃えました。ぬぎっ放しでおいてゆかれる水着は、前の砂地にほして夏の太陽に照りつけられた砂地のぬくもりが、よくかはかしてくれました。三つの大きな丸桶に真水が満杯されておりましたが、水が少くなれば男手が足りない時は女手で天秤棒でかついでこなければなりませんので、じゃぶじゃぶおかまひなしに使われますと、はらはら致しました。

海水茶屋の店先

海水浴客とジイヤ（右端）

日帰へりの御客様から注文を受ければ丼物を取りよせましたが、お茶屋では、のみ物食物は一切扱ひませんで、麦茶だけのサービスでした。自家製の炒り麦に白砂糖をたっぷり入れた甘い麦茶は海から上ってきたお客様には勿論、赤い毛氈の縁台に腰かけて下さる御客様達にも大変よろこばれました。何でもまかせっ放しでおいてゆかれる御客様のあずかり物には随分神経をつかひました。

父作次郎は働き者でしたが、30代から聴覚をつぶしておりましたので長兄“庄吉”と母が“真間長”の中心になっていました。豊かに育った一人娘だった母が19才で廻りもうるさい一介の漁師の家に嫁がされたのか、物心ついてからよく母に聞いたりしたものですが耳の遠くなった父をかばひながら舅姑に仕え、冬は漁師、夏は海水茶屋の中心となって私共８人の子供を育て上げてくれた母は、こまかく心くばりのあって優しい笑くぼ、柔和な笑顔で真間長の小母さんと、みな様から親しまれました。働き通しの母の姿をみながら私共はそれなりに家業を手伝ってまいりました。その母が昭和10年９月、狭心症で急逝しました。私共はいつのまにか母の行年を越えすぎてゐますが、母の姿は私共のとうてい手の届かない高い処にあって慈悲深く私共を見守ってゐてくれます。

徴兵で横須賀の海兵隊に入った長兄庄吉の水兵服姿は背丈もあって恰好よく似合いました。磊落で明るい性格、目鼻立の大きく整って大磯の羽左右衛門とはやされて避暑客の人気者でしたが、第一期の町会議員在任中に三代目長五郎を継ぐまもなく45才で病死致しました。二人の養子もおりましたけれど、私共も家を出て時代も代り、茶屋の様式も変りましたので、海水茶屋真間長三代は終りましたけれど、祖父も父も庄吉兄も、ごひいき筋で謡曲の稽古を一緒に受けさせていただき、時折に正座して右手のこぶしを膝において口ずさむようにして謡ってゐた姿を憶い出します。

朝早く波打ぎわに小さな可愛い貝をひろえるのが愉しみでした。とにかく砂地がきれいでした。砂地に寝ころんでつまみあげた甘ずっぱい砂の香りがむせかえってきて胸がつまります。時折に昔のおなじみ様が訪ねて下さって、なつかしいあれこれに花を咲かせ時を忘れております。　　（故人　南本町住）

＊原文のまま掲載させていただきました。

【表紙写真】

戦後の光景

神明町の路上で進駐軍の兵士の乗るジープに群がる子どもたち。好奇心旺盛な子どもたちは、片言の英語で兵士たちと会話をかわした。

この写真は、Perry.J.Pomeroy Jr. 氏の撮影で、昭和21年８月15日の撮影とされる。同氏は昭和20年10月から１年間日本に滞在し、当時の人々の表情を数多く写真におさめている。

『毎日グラフ別冊　ニッポン40年前』（昭和60年　毎日新聞社刊）より。

大磯の戦禍

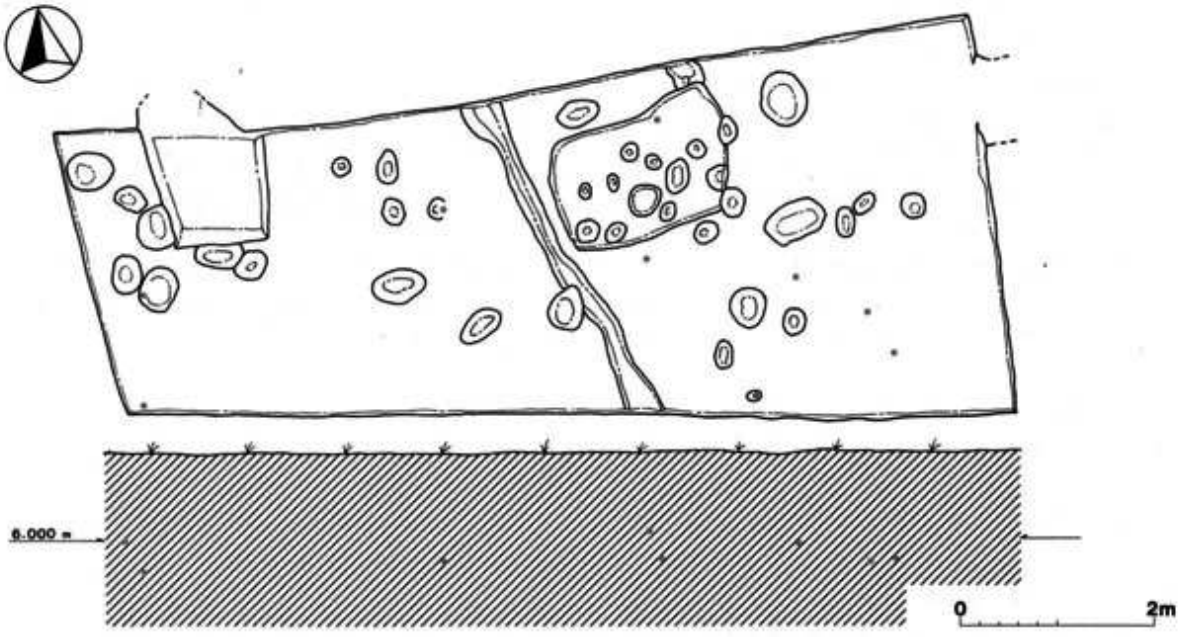
戦後50年を期に、各地でさまざまな催しが行なわれています。

平塚や八王子の激しい空襲は、一般によく知られています。従来、平塚では海軍火薬廠をはじめとした軍需工場の存在が、その大きな要因だとされてきました。しかし、最近では米軍の本土上陸作戦を背景に、両都市ともに戦略的に重要な都市として位置づけられていたことからの攻撃であったとの見方が有力で、その空襲の激しさは想像を絶するもののようでした。二宮町でも昭和20年8月5日、艦載機の機銃掃射によって犠牲者が出ており、これは後に「ガラスのうさぎ」として小説化され、有名になりました。

では、大磯はどうだったのでしょうか。もちろん、平塚や八王子のように壊滅的な被害はないものの、大磯でもいくらかの被害を受けています。ここでは、地元の方々からお聞きしたお話や、持ち込まれた資料、発掘調査などを紹介し、大磯の戦禍の跡をたどってみようと思います。

大磯では、駅周辺と山王町の旧郡役所付近、および寺坂が焼夷弾の被害を受けており、これらの被害の根拠としても、いくつかの遺物が見つかっています。例えば、大磯小学校敷地からは、施設工事に伴って、多量の焼夷弾が見つかりました。出土状態は、規則的に積み重ねられていたため、おそらく駅周辺に落ちた焼夷弾を集積して遺棄したものと思われます。また、平成5年におこなわれた竹縄遺跡（旧オーナンバ株式会社跡地内）の発掘調査においても、8本にのぼる焼夷弾が検出されました。ここでは、突き刺さった状態で検出されており、土の焼けている箇所も確認されていることから、落とされた当時そのままの状態であった

竹縄遺跡　焼夷弾出土状況



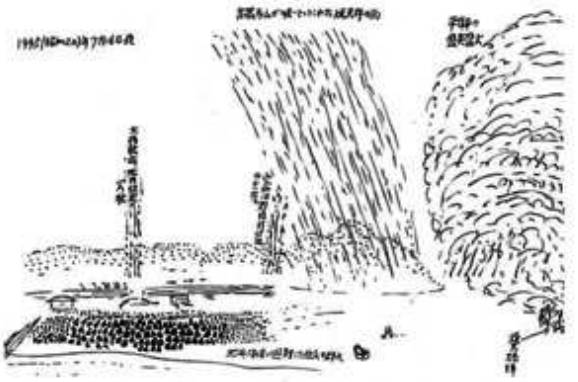
竹縄遺跡　焼夷弾出土状況・平面図および垂直分布（國見　1995作成）

ことが分かります。

これらの焼夷弾は、昭和20年7月16日の平塚大空襲の際に被弾したものと思われます。当時、迫り来る戦火に不安を抱きながら、多くの人々は海岸に避難したようです。果たして大磯が攻撃目標にあったのかは明らかではありませんが、平塚のそれと比べれば、大磯における被害は少なくてすみました。しかし、このほかにも町内の山から焼夷弾を採集された人も多く、その一部が資料館に届けられています。いずれもM50と呼ばれるマグネシウムとテルミットの合金製の焼夷弾で、平塚大空襲に使用されたものと同一のものです。このことからみても、平塚大空襲に際して、大磯にも少なからず焼夷弾が降り注いだことは間違いありません。このときの状況を、高麗山が焼夷弾を吸い取ってくれたという印象を話す方もいられます。

寺坂では、平塚大空襲を山の上から見ていた方もいられました。米軍機は、はじめ相模湾から侵入し、須賀から焼夷弾を落としはじめました。そして、次第に市街へとその攻撃範囲をひろげていったそうです。焼夷弾が降り注ぐ様は、まるで夕立のようだったといいます。ところが、次第に寺坂へ近づいてきたので、大急ぎで家に戻り、寝ていた皆を起こして避難しようとした矢先に、寺坂にも焼夷弾が落とされてしまいました。結局、寺坂はおよそ半数の世帯が焼けだされてしまいました。なぜ寺坂に焼夷弾が落とされたのかは分かりませんが、後になって、八坂神社に兵隊が詰めていたので、米軍機はそれを知っていて、攻撃したのだという噂がたったそうです。さらに、平塚大空襲の際には、平塚の城島に設置されていた砲台によって撃墜された米軍機の乗員が、パラシュートで花水川に降りたといい、それを見物に行ったという話も聞かれました。また、日時は違いますが、国府新宿では列車を狙った機銃掃射を受け、多数の死傷者が運び込まれ、地元の人々が看護にあたったこともあったようです。

なお、終戦後しばらくたって、寺坂のK家の裏の畑にアメリカの物資が落ちたことがありました。昼頃、出縄（現平塚市）方面から寺坂へ向かって低空飛行で飛行機が通過したかと思うと、ドカンと大きな音がしたそうです。はじめは爆弾だと思ったとのことですが様子が違うので、落ちたところへ行ってみると、たくさんの箱が散乱し、タバコ、チョコレート、歯磨き粉などとともに、カンやビンに入った飲み物が壊れ、あたりは池のようになっていたといいます。当時は、物資の統制の真っ只中で、物不足だったこともあり、噂を聞きつけて出縄や生沢からも人が集まり大騒ぎだったそうです。結局、落下した物資は、拾い集められて



空襲の様子を描いた絵

荷車に積まれました。その量は荷車3台分ぎっちりあったといいます。それらは、警察か役場へ届けられたようですが、それでも、かなりの人々が家に持ち帰りました。お話をしてくれたおばあさんも、息子が戦地から帰ってきたら食べさせてやろうと思い、内緒で持ち帰って、裏山のオイナリサンに隠しておいたといいます。そして、集まった人々は、その豊富な物資を目のあたりにし、「日本が負けるのは当然だ」と口々に言い合ったそうです。

しかし、このようなエピソードを知る方々も少なくなりました。時代を語り継ぐ人も、次第に高齢化しつつあります。一方では戦争を知らない世代が台頭し、資料館でも、戦中、戦後を記録化し、資料を収集する必要性が求められてきています。当館においても、今までに戦争にかかわる資料の寄贈をかなり受けてきました。例えば、出征にかかわる文書類から日の丸の寄せ書き、戦地で使用していた道具、戦況を生々しく伝える新聞、物資の統制により使われるようになったさまざまな代用品、衣料の配給のための衣料切符、あるいは寺院の梵鐘の供出の話などもあります。これらの資料や情報は、当時の時代背景とともに、確かに戦争のある側面を指し示すものではあります。しかし、敗戦という事実に隠されて、別な側面、いわゆる加害者としての側面を、そこに見いだすことは必ずしも容易ではありません。

すでに博物館のなかには、豊富な資料の裏付けにより、多彩な事業を積極的に展開しているところも多いようです。ただし、それらを企画している担当者も、実はほとんどが戦争を知らない世代であることも事実です。20年前、10年前ならば、博物館職員のなかにも戦争体験者が存在していた可能性もあったわけですから、明らかに時代が変わり、そして人が変わってきて

います。それによって、戦争を問う姿勢にも変化が見えてきたようにも感じます。もちろん、博物館としては、加害者であり被害者でもある、あの不幸な戦争を史実として正確に記録し、場合によっては体験者の代弁を務めることも必要だと思います。しかし、ただ代弁者として受け身にまわるばかりではなく、それらの集積した資料を如何に活用するのかということも考えなければなりません。

戦後50年を迎えた今年、各地の博物館がこぞって開催している特別展や事業は、博物館がどのように戦争を取り扱っていくべきなのか、あるいは、今後の博物館の役割そのものを考えるうえでも大切な課題を提示しているといえそうです。　　（当館　佐川和裕）

＊

博物館で開催された最近の主な特別・企画展

- 『東京大空襲　戦時下の市民生活』
  1995．2．4～ 3.19　（東京都江戸東京博物館）
- 『戦後50年　焼跡からの復興』
  1995．7．1～11.30　（台東区立下町風俗資料館）
- 『44万7,716本の軌跡～平塚の空襲と戦災～』
  1995．7.15～ 8.30　（平塚市博物館）
- 『戦争と豊島区』
  1995．7.29～10．1　（豊島区立郷土資料館）
- 『苦難の日々も　国立の戦中・戦後をふりかえる』
  1995．8.15～10.22　（くにたち郷土文化館）

【トピックス】

◇バードモデリングに挑戦

8月3日、4日に行なわれた子ども歴史教室で“バードモデリング”を試みました。これは、剝製を参考にして、できるだけ忠実な模型を実際に作りながら、鳥の進化や体の特徴を知ろうとするものです。

模型の作り方は、①まるめた新聞紙に針金を巻いて芯にして、針金で足を取り付け、②紙粘土で形を整えてよく乾燥させ、③絵の具で色を塗り、④台木にとりつけて仕上げます。完成した作品は、2週間ほど資料館のエントランスホールで展示しました。本物と見間違うほどの秀作も多く、来館者にもなかなか好評だったようです。

①

②

③

④

◇一部展示替え

常設展示室の小コーナー「歴史を語る品々」の展示替えをおこないました。これは、例年9月に受け入れている博物館実習生の館務実習の一環として実施しているものです。今回は、「癒（なお）すー快復に向けてー」と題して“健康”をテーマに展示しています。この展示は、来年度の実習まで、約1年間展示する予定です。5大学10名の実習生の共同作業による労作を是非ご覧ください。

秋季特別展

「牧野富太郎と西相模の自然」

牧野富太郎博士の肖像（高知県立牧野植物園提供）

大磯町郷土資料館では、平成７年10月15日から11月19日まで、平成７年度秋季特別展として「牧野富太郎と西相模の自然」を開催いたします。

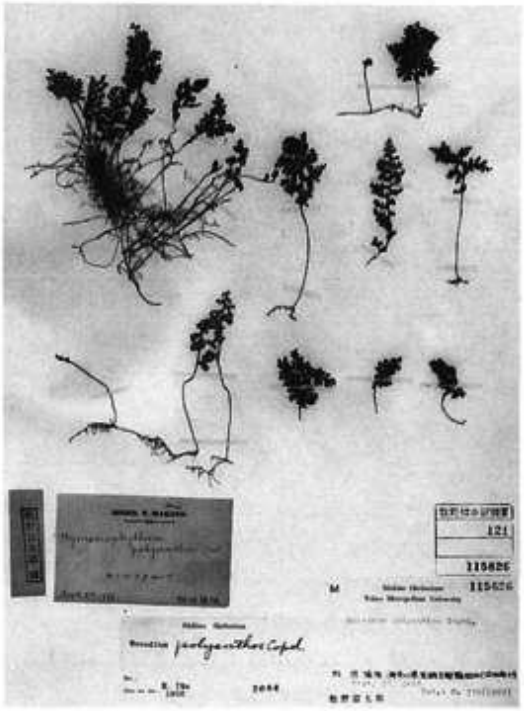
西相模地方は、植物の種類が豊富で加えて東京近郊ということもあり、たいへんよく植物相が調べられてきた地域です。

古くは、江戸時代に長崎出島のオランダ商館付医員として日本に来ていたケンペル、ツンベリー、シーボルトがオランダ商館長の江戸参府に随行し、箱根越えをする際に植物を採集。それを持ち帰りヨーロッパで紹介したことから始まりました。

明治時代に入ると数多くの植物学の専門家、アマチュアの愛好家が訪れています。「日本植物学の父」といわれる牧野富太郎博士も明治42年に創立した県内の植物愛好家のグループ「横浜植物会」を直接、指導されていたこともあり、度々、この地域に足を運ばれています。

この度の特別展では、牧野富太郎博士の西相模地方での活動を追っていきます。採集された植物、日記等を通して同氏の西相模での活動の成果を見ていただきたいと思います。

なお、会期中は、東京都立大学名誉教授・小野幹雄氏の記念講演会を開催いたします。テーマは、「牧野富太郎　その業績と人柄」で牧野博士の業績、思い出を語っていただきます。ふるってご参加ください。



1886年９月27日に採集されたホソバコケシノブ
（東京都立大学理学部牧野標本館蔵）

ツバキの細密画（牧野博士筆・高知県立牧野植物園蔵）

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧になるか、館へ直接お問い合わせください。

▼秋季特別展

『西相模の植物文化史　牧野富太郎と西相模の自然』

10月15日（日）～11月19日（日）

日本植物学の父と称される牧野富太郎博士が、明治末期以後、箱根を中心とした西相模地方で採集した植物標本や日記などを展示し、同氏の西相模での足跡を追っていきます。

▼特別展記念講演会（申込制　定員80名）

10月15日（日）　午後1時30分～3時

『牧野富太郎 その業績と人柄』

講師　東京都立大学名誉教授　小野幹雄氏

▼企画展

『なつかしの"めんこ"展』

平成7年12月3日（日）～平成8年2月18日（日）

"めんこ"を通して、なつかしいヒーローたちに出会いませんか。

『雛人形展』

平成8年2月25日（日）～4月7日（日）

当館に収蔵されている、明治から昭和にかけての雛人形を、一同に公開します。

▼郷土史講座（申込制　定員30名）

「西相模の近代史」をメインテーマに2回の講座をおこないます。なお、本講座は、かながわオープンカレッジ講座と連携しており、広く県民の皆様の参加を募集します。

2月3日（土）　午前10時～12時

『鉄道の遺した"もの"たち』

講師　大磯町郷土資料館学芸員　國見　徹氏

＊場所　大磯町郷土資料館

2月17日（土）　午前10時～15時

『箱根の別荘地開発』（午後から現地見学）

講師　箱根町立郷土資料館学芸員　鈴木康弘氏

＊場所　箱根町立郷土資料館（現地集合）

▼自然観察会（申込制　定員30名）

12月9日（土）、10日（日）

『木の実を使ったクリスマスリース作り（予定）』

3月10日（日）

『地学めぐり（予定）』

【資料の受入】

（寄　贈）ご協力ありがとうございました。

大　磯	森田　康夫氏	テンビンバカリ
大　磯	木村　純子氏	カワラヒワ 他
大　磯	飯田　福信氏	端切れ、絵はがき
大　磯	磯辺　晴彦氏	ハサミバコ 他
大　磯	山下　久年氏	着物
国府本郷	金井　令次氏	漆喰画
国府本郷	原田　平一氏	テネゲエ（手拭）
国府本郷	山口　進氏	神棚他
西小磯	鈴木　昇氏	畳付きのゲタ
西小磯	中山　和也氏	トラツグミ 他
西小磯	増尾　州司氏	焼夷弾
東小磯	小野　悦滋氏	ヘビの脱け殻
平塚市	菊池　規雄氏	書籍
平塚市	加藤　春雄氏	ハヤブカシ 他
小田原市	國見　徹氏	メジロの巣
秦野市	北出　睦美氏	雛人形

（寄　託）

裡道区　　獅子頭

（移　管）

大磯町消防本部　　落車（巻式ホースカー）

（製　作）

大磯町郷土資料館　　サルンボ

（購　入）

絵はがき

Report－大磯町郷土資料館だより－No12
平成7年9月30日
編集発行　大磯町郷土資料館
〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
TEL 0463（61）4700
FAX 0463（61）4660